シンポジウム Symposium

プログラム Program

アートはまちを Does Art Really Help Save Our Community? すくわない？

2016.11.3（木・祝）
14:00 – 16:30 （13:00 開場）

開場 13:00
＊開会までの間、展覧会をご覧いただけます。

第１部・講演 14:00 ~ 15:30
①「公共空間の中の絵画」パトリック・ハブル（＊逐次通訳あり）
②「武田家での制作」西島治樹
③「空港とアート――のと里山空港アートナイト2016より」高橋裕行
④「アートとまち――Minatomachi Art Table, Nagoya ［MAT, Nagoya］の活動」吉田有里

第２部・パネルディスカッション 15:45 ~ 16:30
「アートはまちをすくわない？」 モデレーター：松田愛（富山大学芸術文化学部講師）

パネリスト Panelists

パトリック・ハブル
Patrik Hábl
画家
プラハ美術工芸大学非常勤講師

1975年チェコのズリーンに生まれる。2000年にプラハ美術工芸大学を卒業し、同大学で絵画を教える。空間を使った絵画表現やインスタレーションを発表し、ミュンヘン、アムステルダム、リヨン、ハーグ、ミラノでの個展、ニューヨーク、北京、イスタンブールでのグループ展など、世界各国で活躍する。近年、プラハのDOX現代美術センターの個展で大規模な絵画インスタレーションを発表。また、プラハ国立美術館聖アネシュカ修道院では、中世ゴシック・コレクションの中で展示を行う。2015年には、京都の瑞雲庵での「日本とチェコ現代アートの交流展」（2016年には東京のチェコセンターに巡回）、北京ビエンナーレに参加。同年、富山大学芸術文化学部で「絵画の可能性」と題する特別講演を行う。

西島治樹
Haruki Nishijima
美術家
富山大学芸術文化学部准教授

1971年静岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了後、国際情報科学芸術アカデミー（IAMAS）卒業。IAMAS在学中に制作した《Remain in Light》は、アルスエレクトロニカ2001でディスティンクション賞（オーストラリア）を受賞。Images Festivalでベストオブインスタレーション賞（カナダ）、VIDA4.0ではグランプリ（スペイン）を獲得し、国際的な評価を得る。リエカ現代美術館の「FONA Festival」（2003年、クロアチア）、長崎県美術館の「デジタル遊園地」（2006年）など、国内外の展覧会に参加。《枯れたGPSのために》（2015年）で、オーケストラ・アンサンブル金沢と共演。2016年の「め・目・メ」展（2016年、ミュゼふくおかカメラ館）では、メディアアート・インスタレーション《スナイパー通りの写真館》を発表する。

吉田有里
Yuri Yoshida
アートコーディネーター
Minatomachi Art Table, Nagoya
港まちづくり協議会

1982年東京都生まれ。名古屋市在住。多摩美術大学大学院美術研究科芸術学専攻修了。2004年～2006年芦立さやかとともに「YOSHIDATE HOUSE」（横浜）を運営。2004年～2009年BankART1929勤務。2009年～2013年あいちトリエンナーレのアシスタントキュレーターとして、まちなか展示の会場である長者町エリアを担当。現在は、名古屋の港まちをフィールドにしたアートプログラムMinatomachi Art Table, Nagoya［MAT, Nagoya］のプログラムディレクターをアーティストの青田真也、アートマネージャーの野田智子とともに共同でつとめている。

高橋裕行
Hiroyuki Takahashi
キュレーター

1975 年生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒、国際情報科学芸術アカデミー（IAMAS）卒業。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科助手、SKIP シティ映像ミュージアムキュレーターを経て、現在はフリーランスのキュレーター。創造性、テクノロジー、社会の接点をテーマに活動している。主な企画展に「あそびイノベーション展」（北九州イノベーションギャラリー）、「動き出す色の世界」「映像でみる世界の暮らし たべる、すまう、まとう」「影のイマジネーション～星降る夜の魔法使い～」展（SKIP シティ映像ミュージアム）など。著書に『コミュニケーションのデザイン史』（フィルムアート社、2015）がある。2016 年 10 月には「のと里山空港アートナイト」の第一弾として、ライゾマティクスリサーチ ×FaltyDL による空港プロモーションビデオ公開収録イベントを企画する。

会場 Venue

重要文化財武田家住宅

Important Cultural Property,
Takeda Residence

〒 933 - 0133
富山県高岡市太田 4258
(4258, Ota, Takaoka-shi, Toyama, 933-0133, Japan)

アクセス Access
バス｜高岡駅よりバス伏木経由氷見行き
辰の口下車 徒歩１０分
JR氷見線｜雨晴駅下車　徒歩２０分
能越自動車道｜高岡北ICより車で１５分
北陸自動車道｜小杉IC・砺波ICより車で５０分

画像提供：高岡市教育委員会

武田家は、甲斐の武田信玄の弟逍遙軒信綱（しょうようけんのぶつな）（1525～1582）の子孫と伝えられており、代々太田村の肝煎（きもいり）を務めた豪農であり、約200年前に建設された肝煎住宅そのままの姿を現在に伝えている。この住宅は、安永年間（1772～1780）から寛政年間（1789～1800）にかけて伏木勝興寺本堂が再建されたときの余材で建てられたという伝承を持っており、構造や手法からもその頃のものであることが分かっている。また明治以降は山岡鉄舟や横山大観ら多くの著名人が当家に滞在し、それぞれ作品を残している。
（高岡市公式ホームページより）

（上）パトリック・ハブル《Screen Tearing》の制作風景、2016年
（下）パトリック・ハブル《Screen Tearing》2016年
シュパインスハルト修道院教会堂でのインスタレーション、ドイツ、バイエルン州

（上）西島治樹《Remain in Light》2002年、パフォーマンス＋メディアアート、ブラジル、サンパウロ（虫捕り網でアナログ電波を捕まえる）
（下）西島治樹《Remain in Light》2003年パフォーマンス＋メディアアート
リュブリャナ城牢獄内でのインスタレーション、スロベニア、リュブリャナ（捕まえたアナログ電波が光になって飛び立つ）

パトリック・ハブル Patrik Hábl ＋ 西島治樹 Haruki Nishijima

2016.11.3（木・祝）－11.7（月）

9:00 – 16:30 入場無料
＊ 初日は13:00から開場
＊ 最終日は16:00終了

シンポジウム Symposium

2016.11.3（木・祝）
14:00 – 16:30 （13:00 開場）
二人の作家と二人のアートコーディネーター/キュレーターによる
講演およびパネルディスカッションを開催します。

パネリスト Panelists

パトリック・ハブル Patrik Hábl
画家
プラハ美術工芸大学非常勤講師

西島治樹 Haruki Nishijima
美術家
富山大学芸術文化学部准教授

吉田有里 Yuri Yoshida
アートコーディネーター
Minatomachi Art Table,Nagoya
港まちづくり協議会

高橋裕行 Hiroyuki Takahashi
キュレーター

＋モデレーター：松田愛（富山大学芸術文化学部講師）

パトリック・ハブル氏による公開制作 Open Studio

2016.10.29（土） 14:00 – 16:00
富山大学芸術文化学部 高岡キャンパス
エントランスホール
富山県高岡市二上町180番地

会場 Venue

重要文化財武田家住宅
Important Cultural Property, Takeda Residence
〒 933 - 0133
富山県高岡市太田 4258
(4258, Ota, Takaoka-shi, Toyama, 933-0133, Japan)

主催｜国立大学法人 富山大学 芸術文化学部　後援｜高岡市 ・ 高岡市教育委員会
企画｜松田愛 ・ 西島治樹 （富山大学芸術文化学部）
お問い合わせ｜富山大学芸術文化学部総務課 総務・研究協力チーム Tel.0766-25-9139　http://www.tad.u-toyama.ac.jp
文部科学省平成28年度科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）
Initiative for Realizing Diversity in the Research Environment

Patrik Hábl

パトリック・ハブル

プラハでの路上絵画《MAGISTRALA-PAINTING 400 M2》の制作風景、2013年

アクリルや油彩を用いて、モノトーンの色彩の濃淡がつくりだす詩的で抽象的な絵画を描く。2013 年にはプラハの街中で、路上に 400 ㎡の巨大な絵画を描くプロジェクトを行った。同じ 2013 年には、「風景の変容」と題する個展で、縦 6m、横 30m にわたる絵画空間をギャラリーにつくり出した。そのほか、教会での絵画インスタレーションなど、パブリックな場所での発表を多数行う。空間のスケールを活かした絵画制作を行い、絵画によって空間がどのように変容し、そこで人々が何を感じるかということに関心を持っている。

《Japan》2013年

International Art Exchange Exhibition & Symposium

国際芸術交流展＆シンポジウム

アートはまちを

Does Art Really Help Save Our Community？

すくわない？

今日、まちや地域の活性化を目的とするアートプロジェクトが全国で開催されています。まちづくりには多様な方法があり、アートもそのひとつとして活用されています。アートを活用したまちづくりは、地域文化への理解を促し、まちの魅力を高めるとともに、多様な価値観を育むことが期待されます。しかし、アートそのものは、必ずしもまちや地域を活性化することを目的としているわけではありません。それでは、アートはどのようにして、まちと関わってきたのでしょうか？そして、これから先どのような関係性を築いていくのでしょうか？

本シンポジウムは、アートとまちの関係をめぐって、展覧会とともに開催するものです。富山県高岡市太田地区の重要文化財武田家住宅を舞台に、日本から遠く離れたチェコの画家パトリック・ハブル氏と、富山在住の美術家でメディアアート作品を制作する西島治樹氏の、二人のアーティストによる展覧会を行います。ハブル氏は、これまで宗教建築等の様々な公共空間に自身の絵画を設置してきました。今回、ハブル氏は富山大学で短期間の公開制作を行い、制作した作品を武田家住宅で展示します。また、場所のもつ意味や歴史性を問いかける西島氏は、今回富山で自身のルーツを探りながら作品を制作します。

シンポジウムでは、両作家に加え、二人の方にパネリストとして加わっていただきます。ひとりは、創造性、テクノロジー、社会の接点をテーマに、様々なプロジェクトを企画運営されているキュレーターの高橋裕行氏です。もうひとりは、名古屋の港まちで、アートや文化のための場所づくりに携わるアートコーディネーターの吉田有里氏です。

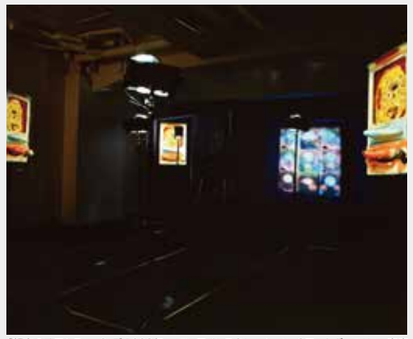
日々の芸術文化との関わりや、芸術文化とまちとの関わりについて議論を深めたいと思います。

In recent years, art projects aimed at revitalization of communities and regions are being held all over Japan. There are various strategies employed for community development, and Art has become one of the most popular methods. The strategy of "community development through Art" is based on the expectation that Art will help to nurture a greater understanding of the culture in the region, will create an awareness of aesthetics in the community, and will also encourage the people of the community to diversify their interests and find value in new types of experiences and way of thinking. However, Art in itself is not created to revitalize communities. Then, how has Art affected the community? What kind of relationship can be built between Art and the Community in the future? These are the questions we pose and hope to answer through this Symposium.
This Symposium is held along with an exhibition focusing on the relation of Art and Community. The exhibition by two artists takes place in a building designated as an "important cultural property," the Takeda Residence at Ota, Takaoka City, Toyama. One artist, Patrik Hábl, is a prominent painter from the Czech Republic who often shows his work in public spaces such as churches. During his stay in Toyama, he will create some new works in an open public format at Toyama University. These new works will be exhibited at Takeda Residence. The other artist, Haruki Nishijima, is a media artist presently based in Toyama who researches the history and significance of local sites for his media creations. For this event, he creates his work while seeking to understand his roots in Toyama. During the Symposium, in addition to the aforementioned artists, two other panelists will take part in the discussions. One is a curator from Tokyo, Mr. Hiroyuki Takahashi, who has organized various art projects centered around the theme of the interrelationship of creativity, technology, and society. The other panelist is an art coordinator, Ms. Yuri Yoshida, whose work focuses on fostering environments and venues for Artistic and Cultural events at Minatomachi (Port Town), Nagoya.
With this event, we hope to encourage the exchange of ideas and insights to help us think about how we relate to Art and Culture in everyday life and how Art and Culture can relate to the community.

Haruki Nishijima

西島治樹

《Remain In Light》2001年、パフォーマンス＋メディアアート、「ArsElectronica2001」OKCentrum、オーストリア、リンツ



《都市のオアシスver2. 5》1998年、メディアインスタレーション、Gアートギャラリー、東京

パチンコをモチーフとする観客参加型の作品《都市のオアシス ver2.5》(1998)や、参加者が虫取り網で街中のアナログ通信電波を採取し、光として解放する《Remain in Light》(2000-2011)など、映像・コンピュータ・自然の法則を組み合わせて、仮説として捉えた世界観をメディアアート作品として発表。2016 年には、ピンホール映像と現実から採取された様々なデジタル画像がもうひとつの風景を紡ぎ出す、メディアアート・インスタレーション《スナイパー通りの写真館》を発表した。電波、パチンコ、映画、国境などをテーマに、真面目なユーモアや大いなる誤訳を取り入れながら、作品制作を通じて様々な社会問題を提起する。

《Kakejiku》2016年、パドヴァの聖アントニウス教会でのインスタレーション、チェコ、ソコロフ

《スナイパー通りの写真館》2016年、メディアアート・インスタレーション、ミュゼふくおかカメラ館、富山県